

今、改めて考えたい そもそも探究とは？ なぜ探究が必要なのか？

学習指導要領の改訂により高校においてその名を変えた「総合的な探究の時間」。これからの社会を生きていく生徒に必要な資質・能力を育てていくために、なぜ探究が必要なのか。そもそも探究とは何か、関西大学の黒上晴夫教授に伺いました。



関西大学
総合情報学部 教授
黒上晴夫

くろかみ・はるお ● 1959年生まれ。大阪大学人間科学部卒業。同大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学技官および助手、金沢大学助教授を経て、2002年より現職。専門は教育工学。研究領域はカリキュラム、教育評価、ICT活用。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」委員として学習指導要領の改訂に深く関わる。

**思考の筋道を立てやすくする
考えるための技法＝思考スキル**

自宅で、子どもに「〇〇について教えてほしい」と専門外のことを尋ねられたとして、「私は国語の教師だから無理」とは普通、言いませんよね。知識はともかく、それなりに調べ方や考え方、学び方を伝えるはずですが、学校で専門外のことを質問をされたとしたらどうでしょう。スルーしてしまうこともあるのでは？

教育活動において知識同様大切なのは、学びのプロセスであり、学びに向かう力です。国語の先生なら、例えば、「こういう分析の手法を使うことで源氏物語の世界が深まった。参考になるのでは」と伝えることも、学びにとって意義あることです。

何かについて調べ、考えようと、新たな疑問が生じ、さらに考えていくことで、理解が深まっていきます。その際、既存の知識と関連付けたり、順序立てたり、頭の中ではさまざまな思考の手順を働かせているもの。一般に思考スキルと呼ばれ、今回の学習指導要領では「考えるための技法」として、「比較する」「分類する」「関連付ける」などが例示されています。漠然と「考える」では、どう考えればいいか迷う生徒も出てきますが、「意見を分類して

考えてみよう」ならば、思考の筋道がぐつと立てやすくなるでしょう。

前置きが長くなりましたが、総合的な探究の時間は、こうした思考スキルを駆使しながら学びを深めていく場でもあります。まずは「探究」とは何か。新しい学習指導要領の確認から始めさせていただきます。

**問題解決に向け、自分なりの
主張や提案ができるまでに**

現行の高等学校学習指導要領では、総合的な学習の時間の「目標」について、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して」という書き出しで始まっています（P12参照）。

実は、この表現が一部で議論になっていました。「横断的・総合的」であることと「探究的」であることが、ともに求められるのか、片方だけいいのかわりという議論です。

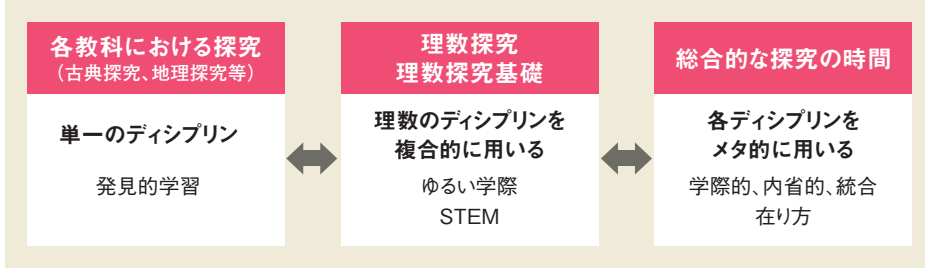
個人的には前者の立場で説明してきましたが、確かに、解釈次第では後者と捉えることもできますよね。実際、総合的な学習の時間といえば、教科横断的な取り組みという認識が強く、現実にはキャリア教育、もしくは事実上の受験指導に充てられている高校が少なくないことも周知の通りです。

一方、新高等学校学習指導要領では、「探究の見方・考え方を働かせ、横断



図1 探究と各教科のディシプリン

※黒上教授資料より編集部で作成



私の考えを付け加えるなら、学習を通じて「この問題はどう解決すべきだ」というように自分の主張や提案ができるようになること。その点で、調べ学習とは違います。では、「探究の見方・考え方」とは何か。同総則編や中教審答申の文言を借りつつ、私なりにまとめると、こういうことになります。「横断的・総合的な学習で扱われる幅広い事象に対して、どの教科の見方・考え方(教科ならではの物事を捉える視点や考え方)でアプローチすればいいか俯瞰的に考え、適切に組み合わせながら問題を解決していくこと。それも、一定の答えが出て終わりではなく、実生活や自分の将来と関係付け、見通しをもつて学び続けること」

今回の改訂は、すべての教科等で、育成したい資質・能力を3つの柱で整理したことが特色で、それは総合的な探究の時間も同様です(P12参照)。学習の時間での議論が先鞭をつけたようなものですが、今回、改めて、この時間です。今回、改めて、この時間です。今回、改めて、この時間です。

「探究の見方・考え方」とは何か。その前に、そもそも「探究」とは何か。整理したいと思います。2018年7月公表の「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「探究」について次のように説明されています。「総合的な探究の時間における学習では、問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく。これを探究と呼ぶ。(略)要するに探究とは、物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのことである」

その「見方・考え方」と近い意味をもつ言葉に「ディシプリン」があります。その教科をその教科たらしめる中心部分。単なる知識ではなく、それらをどう捉え、どういう場面に当てはめるかといった教科の核心、という説明ではわかりにくいでしょうか。今回、探究と付く科目が複数登場しましたが、その違いを説明する際にも、私はこの言葉を使っています。

まず、古典探究、地理探究のような各教科における探究は、それぞれに固有のディシプリンを使い、その教科の理解をより深めることを目的に探究活動を進めます。既知の事柄について、うまく導かれながら、「こういうことか!」という感動とともに学習者自らが発見したように展開される「発見的学習」にも似ています。

その教科をその教科たらしめるディシプリンを複合的に使う

今回、高校だけが総合的な「探究」の時間になり、学習指導要領上の表記も、小・中学校は「探究的」、高校では「探究」と使い分けられたこともポイントです。高校での「探究」は、それまでの「探究的」な学習と比べ、より高度化し、自律的な学習へ発展するものでないといけません。

総合的な探究の時間では、それをさらに広げ、実社会・実生活にある複雑な問題に対して、どの教科のディシプリンを必要とするか判断したり、組み合わせたりしながら、メタ的に使うことが求められます。探究の見方・考え方を生かした、フルバードジョンの探究学習が行われる時間と云っていいでしょう。

今回の改訂は、すべての教科等で、育成したい資質・能力を3つの柱で整理したことが特色で、それは総合的な探究の時間も同様です(P12参照)。学習の時間での議論が先鞭をつけたようなものですが、今回、改めて、この時間です。今回、改めて、この時間です。

「知識と知識が関連付けられ構造化することで深まる理解」

この「見方・考え方」と近い意味をもつ言葉に「ディシプリン」があります。その教科をその教科たらしめる中心

すぐに忘れる知識ではなく、生きて働く知識・技能を



及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする」です。

ただ、「概念を形成し」という表現が少々難しい。ここで言う概念とは、知識と知識が関連付けられて構造化されたもの。それにより物事に対する理解が深まったり、思考の枠組みが更新されたりすることです。私個人としては、各教科等で学んだ知識と知識が関係付けられず、点在して記憶された状態に対するアンチテーゼと捉えています。断片的な知識では「何年に何が起きたか？」といった穴埋め問題には正解するかもしれないけれど、知識の中核あるいは周辺部まで含めて他者に説明することは難しい。そうではなく、「なぜこうした事象が起こり、なぜこうなったか。それは歴史的、あるいは現代的な文脈ではどういうことなのか」まで理解し、別の場面でも生かせるようになってほしい

わけです。まさに「生きて働く知識・技能の習得」です。

4つのプロセスを発展的に回す 探究のスパイラル

問題解決的な学習が発展的に繰り返される探究では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」というプロセスをたどります。

まず、生徒自ら課題を設定するに当たり、教員の関わりが重要なのは言うまでもありません。それが本来に、その生徒が考えを深めていくのに適当な課題なのか。単なる調べ学習に終わらないためにも、「あなたにとって、それは何が問題か？」「どうすれば解決できるかと思っている？」「と繰り返し問うことが有効です。

集めた情報は、課題に応じて整理・分析します。自由記述式のアンケートを集めたならば、特定の単語がどのくらい使われているか集計する「テキ

ストマイニング」や、複数の書籍・新聞の記述の異同を明確にするといった中間処理が欠かせません。

そして、「まとめ・表現」。他者からの意見や質問、自分自身の振り返りが、新たな問題意識を生み、次のプロセスへと導きます。必ずしもきれいなスパイラルを描く必要はないですが、これを繰り返すことで、課題の質や解決の手法などが向上。探究のプロセスが高度化していくわけです。

こうした学習によって、社会で課題を前にしても、場面に応じて必要なディシプリンを組み合わせながら、解決していけるようになるでしょう。

探究は誰にも等しく求められる これからの社会で欠かせない学習

学びを教科学習の中だけに囲い込むところから脱し、教育課程全体を通して、必要な資質・能力を育てる。それが今回の改訂の目指すところであり、そのコアとなるのが総合的な探究の時間です。ですから探究は、SSHやSGHに代表される一部の高校の少し高度な学習ではありません。

多様な生徒が集まる高校において、関心のありそうな話題を投げかけると、真剣に答えてくれることは多いもの。それがクローン技術による倫理的、哲学的な問題だとしても、進

本気で考えざるを得ない問題、 心、動かされるイシューがカギ



学校の生徒と考えていることは、そう変わりません。確かに、語彙や知識量に多少の差はありますが、時おり本質を突く点は同じです。

ですからカギは、本気で考えないといけないような身近な問題や、心を動かされそうなイシューをテーマとして選ぶよう、うまく導くこと。そこを起点にプロセスを回していけば、自分なりに思考し、意見をもつようになるはず。それが自己効力感を高め、自律的な学びを促し、教科学習にも反映されるようになる。さらに、学びが自分の生き方につながっていることに気づき、社会で力を発揮する。探究の学習には、そんな願いが込められていると思っています。

